

## 2019年度 教員の自己点検・自己評価報告書

所属学部 学科	職位	氏 名
経営学部 地域ビジネス学科	准教授	宮本 佳範
最終学歴	学 位	専門分野
名古屋市立大学大学院人間文化研究科 博士後期課程修了	博士 (人間文化)	社会学

### I 教育活動

#### ○目標・計画

##### (目標)

観光を題材として、社会で活かすことができる考え方、表現力、コミュニケーション力などをもった人材を育成することを目標とする。

##### (計画)

自ら問題意識を持ち、調べ、グループで話し合い、発表するような授業構成をゼミ以外の講義でも取り入れて、学生の能動的な学習につなげていく。

#### ○担当科目（前期・後期）

##### (前期)

観光・サービス概論、国内観光地理、地域観光論、総合演習Ⅰ、専門演習Ⅰ、専門演習Ⅲ

##### (後期)

観光・サービス基礎、海外観光地理、現代観光論、レジャー産業論、東南アジアの文化と社会、総合演習Ⅱ、専門演習Ⅱ、専門演習Ⅳ

#### ○教育方法の実践

アクティブラーニングを重視し、応用系の講義科目において学生による「授業」や調べ学習と発表を導入するなど、様々な改善を行った（レジャー産業論、地域観光論、現代観光論、東南アジアの文化と社会）。

ゼミでは観光者を送り出す視点（旅行企画）と、観光者を迎え入れる視点（観光まちづくり・観光振興）の両面を実践的に学ぶ意図で、それぞれ「海外卒業旅行企画コンテスト」「あいち観光まちづくりアワード」という学外のコンテストに取り組んだ。また、2年のゼミでは地域の課題を考える取り組みとして、名古屋に住む外国人の抱える問題などを学習し、日本語学校の「愛知国際学院」の協力を得て、日本に住み始めた外国人に対するインタビューと交流を実施した。

#### ○作成した教科書・教材

観光分野の基礎科目では、重要事項をまとめた穴埋め形式のプリントを作成した。

#### ○自己評価

講義科目に学生の発表等を取り入れた結果、一方的な講義より学生の積極性や集中力を高めることができた。またゼミで取り組んだコンテストについては、「海外卒業旅行コンテスト」で全国2位の成績を得るとともに、3年の「あいち観光まちづくりアワード」で書類選考を通過し、プレゼン審査に臨むことができた。こういった結果は、学生たちが真剣に取り組んだことを表しており、教育活動として取り組んだ意味があったと考えている。これらのことから、教育活動については当初の計画を十分に達成することができたと考える。

## II 研究活動

### ○研究課題

観光振興および観光者の行為の問題等に関する研究

### ○目標・計画

#### (目標)

2017年度まで科研費を得て実施してきた観光倫理研究を発展させ、観光地で生じる問題や観光の影響、リスク等に関する観光者の現状認識等に着目した実証的な研究を行う。また、これまでにはアジアのエスニックツーリズムを研究対象としてきたが、今後は、より多様な事例を求めて、研究対象を広げていく。

#### (計画)

これまで行ってきたエスニックツーリズムにおける観光倫理に関する研究を継続し、論文にまとめる。また、今後研究対象をアジアのエスニックツーリズム以外へと広げるための予備的調査等を行う計画である。

### ○2012年4月から2020年3月の研究業績（特許等を含む）

#### (著書)

- ・宮本佳範「第10章 地域と連携した活動の現実的課題—名東区魅力マップ作りに取り組んで—」愛知東邦大学地域創造研究所編『学生の「力」をのばす大学教育—その試みと葛藤 地域創造研究叢書 No. 22』唯学書房、2014年11月。
- ・宮本佳範「第5章 観光に関わる人権問題」愛知東邦大学地域創造研究所編『人が人らしく生きるために—一人権について考える 地域創造研究叢書 No. 20』唯学書房、2013年7月。

#### (学術論文)

- ・宮本佳範「少数民族観光における観光者の問題行動に関する考察—山岳少数民族が暮らすサバでの調査から—」『日本山岳文化学会論集』第17号、pp. 27-36、2020年。（査読有）
- ・宮本佳範「問題ある観光を行う観光者の意識—ウルル（エアーズロック）登山最終年の事例から—」『東邦学誌』第48巻第2号、pp. 17-32、2019年。
- ・宮本佳範「観光者管理と観光者倫理—ブータンの事例から—」『東邦学誌』第47巻第2号、pp. 1-13、2018年。
- ・宮本佳範「グローバル化するツアー登山の問題と観光者のリテラシー：ベトナムのファンシーパン登山を事例に」『日本山岳文化学会論集』第15号、pp. 91-101、2017年。（査読有）
- ・宮本佳範「ツアー登山問題に関する論点の批判的考察：アクセシビリティとツアー登山者の倫理」『日本山岳文化学会論集』第14号、pp. 67-75、2016年。（査読有）
- ・宮本佳範「観光倫理研究の課題と展望」『観光学評論』第4巻第2号、pp. 135-148、2016年。（査読有）
- ・宮本佳範「ミャンマーの少数民族観光に関する考察」『東邦学誌』第43巻第1号、pp. 9-25、2014年。
- ・宮本佳範「少数民族観光に関わる人権問題と観光倫理—タイ・ラオス・ベトナムの事例から—」『東邦学誌』第41巻第2号、pp. 85-99、2012年。
- ・宮本佳範・大塚奈美「ルーマニア北西部における伝統的生活文化観光の現状と課題：観光対象へのアクセシビリティとオーセンティシティ」『東邦学誌』第41巻第1号、pp. 29-45、2012年。

#### (学会発表)

(特許)

(その他)

- ・宮本佳範、研究成果報告書、研究課題「持続可能な観光の実現に寄与する観光倫理の構築に向けた研究」科学研究費助成事業、基盤研究C、研究代表者、2018年6月。

○科学研究費補助金等への申請状況、交付状況（学内外）

- ・宮本佳範（研究代表者）平成26年度 科学研究費補助金（基盤研究(C)）採択：研究課題名「持続可能な観光の実現に寄与する観光倫理の構築に向けた研究」（課題番号：26360080）【2014年4月から2018年3月】

○所属学会

観光学術学会、日本山岳文化学会

○自己評価

本年度は、当初の目標・計画で述べた通り、アジア以外へと研究の領域を広げる試みを行った。具体的には、オーストラリアでフィールド調査を行い、アボリジニが文化的事情等から観光者に登らないように求めているにも関わらずウルル登山を行う観光者の認識についてまとめ、論文にまとめることができた。

また、これまで研究してきた観光倫理研究に関連して、すでに複数回訪問しているベトナムの山岳地帯で少数民族観光が盛んな街サパでの過去の聴き取り調査に基づき、観光者の問題行動に対する現地住民の考え方、そして観光者の認識等をまとめ、論文として発表した。

全体として、当初の計画通り研究を行い、十分な成果を残すことができた。

### III 大学運営

○目標・計画

(目標)

学部学科会議、委員会などの活動を通じて大学運営に貢献する。

(計画)

大学のブランディングや教育改革、学生募集などが円滑に進むよう、配属された委員会でベストを尽くす。

○学内委員等

教務委員会委員、生協委員会委員長、東邦STEP運営委員会委員

○自己評価

教務委員会の委員を務めるのは初めてであり、年間の流れ等も把握できていなかったため、今年度はまず教務の仕事を理解するよう努めつつ、必要な業務を行うことができた。また、生協委員会は今年度初めて委員会化され、ほぼ毎月委員会を開催した。生協学生委員会の立ち上げを行うとともに、学食の運営に多少なりとも貢献できたと考えている。東邦STEP運営委員会委員は前任者の退職に伴い引き継ぎ、問題なく行うことができた。

以上のことから、大学運営に関してはおおむね当初の計画を達成することができたと考える。

#### IV 社会貢献

##### ○目標・計画

###### (目標)

学生の教育と社会貢献がつながるような教育プログラムを行う。

###### (計画)

ゼミで、地域の問題解決を意識した教育を実施する。インターカレッジコープ愛知の理事としての活動を行う。

##### ○学会活動等

##### ○地域連携・社会貢献等

名古屋市の名古屋城ウェブサイト運営・保守委託業者評価委員を務めた。また、本学が所属する一般社団法人中部経済連合会の観光委員会に出席した。

その他、2年後期のゼミでは、名古屋で暮らす外国人が抱える問題点などについて知るとともに、名古屋にある日本語学校「愛知国際学院」と連携して、日本に住み始めた外国人に対するインタビューおよび交流を行った。

##### ○自己評価

目標として掲げた内容以上に貢献することができた。

#### V その他の特記事項（学外研究、受賞歴、国際学術交流、自己研鑽等）

#### VI 総括

教育活動については、年度当初の計画を実施し、十分にその成果をあげることができた。研究に関しても、限られた時間と予算のなか、おおむね計画通り実施することができた。大学運営に関しては、大きく貢献したといえるものではないが、職責を果たすことができた。社会貢献については、名古屋市の委員やゼミ活動を通して、例年以上に成果をあげることができたと考える。

以 上